

【原著論文】

日本体育大学大学院コーチング学系に所属する大学院生コーチが
修士論文を執筆することの意義伊藤 雅充¹⁾, 小泉 卓也²⁾, 関口 遵³⁾¹⁾ コーチ学研究室²⁾ 院前期コーチング学系*³⁾ 院後期トレーニング科学系*Significance of writing a master's thesis as a graduate student coach
in the NSSU coaching program

Masamitsu ITO, Takuya KOIZUMI and Jun SEKIGUCHI

Abstract: The graduate school at Nippon Sport Science University launched a new master's degree program on coaching in 2011. In this program, practicums spread out throughout the two years program to integrate research-based evidences into coaching practices. Graduate students have to write master's theses to finish the program, which would put a quite heavy burden on working coaches. The present study aims to clarify significance as well as drawbacks of writing a master's thesis as a coach. Participants were eight graduate students supervised by the first author. Four of these graduate students conducted action researches for their theses and the others conducted researches on their own coaching practices, which are also related to action research procedure in some parts. Semi-structured retrospective interviews were conducted after the completion of their master's theses. The interviews lasted for 36–54 min. The recorded conversations were transcribed and analyzed using the Four-Step Coding technique. Some participants mentioned that they had understood the importance and usefulness of the knowledge delivered during normal classes, but during writing their theses they realized that they had not made knowledge networks among what they had learnt. All of the participants believed that writing master's theses could facilitate their deeper understanding of rationales behind their coaching practices. Some stated that they could coach with much more confidence than before by finishing master's theses. Time issues were the only drawbacks reported by these coaches, because some of them had to be away from the actual coaching for a while. Writing master's theses itself could be beneficial for coaches because they could train their logical thinking ability and organize their fragmented knowledge obtained in classes and practices. The time management strategy would be the key to minimize the disadvantage of writing master's thesis to coaching practices.

(Received: May 11, 2015 Accepted: September 28, 2015)

Key words: qualitative analysis, coaching practice, logical thinking

キーワード：質的分析、コーチング実践、論理的思考

目 的

日本体育大学大学院体育科学研究科は2011年4月に
体育実践学コースを新設し、コース内にスポーツ教育・

健康教育学系とコーチング学系の2学系を設けた。
コーチング学系は修了要件単位数30単位のうち、8単
位をプラクティカム関連の実践に割り当てていること
から分かるように、コーチングの実践力向上を目指し
た学系である。しかし、課程を修了し修士号を得るた
めには設定されている単位とは別に修士論文を作成
し、審査を受けなくてはならない。諸外国で展開され
ているコーチ教育を目的とした大学院ではコースワー

*：所属は研究実施時のものを記載した。現在、小泉卓也
は院前期コーチング学系研究員、関口 遵はスポーツ
アカデミー形成支援事業室研究員である。

表 1 研究対象者の修士論文題目

修士論文の題目
アスリートの自律を目指した大学柔道コーチのコーチング実践～技術研究を通して～
コーチの自律性支援行動修得に関する実践研究～中学校剣道部の指導を通して～
Athlete Centred Approach による大学柔道選手へのコーチングに関する実践研究
高校野球における自律支援環境構築に関する実践研究
走高跳のセルフコーチングの在り方に関する研究
中長距離選手のランニングフォーム改善における効果的なコーチング法
水球競技における Game Sense アプローチに関する研究
水球大学女子チームに対する Performance Profiling の導入

クとして修士課程を運営し、修士論文を課していないところも少なくない¹⁾。本学系の目的であるコーチのコーチング実践力向上に対して修士論文の執筆がどのような意味を持つのかを調査することは、今後の本学系のプログラム改善に役立つと考えられる。

大学やスポーツ機関で行われているフォーマルなコーチ教育プログラムの有効性については、長年にわたり多くの研究が批判的な報告を行ってきた²⁻⁷⁾。本学コーチング学系の設置にあたり、これらの批判を参考にしながら、フォーマルなコーチ教育プログラムにおいてもコーチの効果的な学びを支援できるカリキュラムの構成と運営方法を検討した¹⁾。系として「アスリート・センタード・コーチング」⁸⁾の習得を目指すことを掲げたのもその一環である。著者らはアスリート・センタード・コーチングを「アスリートの学びに対する主体的な取り組みを支援するコーチングであり、より高いパフォーマンスの獲得と同時にポジティブな心理・社会的発達を実現させ、スポーツ活動を通じた包括的な人間的成長を目指す」と定義し、その実践に取り組んでいる。そして、コーチ育成者である指導教員と大学院生コーチの間の関係が大学院生コーチとアスリートの間の関係にも継承されるとの考えのもと、研究指導の場面においても指導教員と大学院生の関係は師弟関係というよりも、学びのパートナーであるという意識を両者が持つように心がけている。コーチが主体的に学ぶことができるコーチ教育プログラムの運営を行うことで、これまでにコーチ教育プログラムが受けてきた批判を克服することができると考えられる。この点においても、プログラム構築者の意図とプログラムの成果として大学院生が得た認識が一致しているかどうかを評価することは、プログラム改善にとって重要な意味を持つ。

そこで、本研究では日本体育大学大学院体育科学研究科体育科学専攻体育実践学コース・コーチング学系の第一期生のうち、筆頭著者から研究指導を受けていた大学院生コーチが修士論文執筆に対して持っている

認識を調査し、コーチとして修士論文を作成することにどのような意義を感じているのかを明らかにすることとした。それと同時に、新しく構築したコーチング学系のコーチ教育プログラムが大学院生コーチの主体的な学びを引き起こすことに貢献できているかどうかについて調べ、今後のプログラム改善に向けた示唆を得ることを目的とし研究を実施した。

方 法

研究対象者

本研究で対象としたのは、日本体育大学大学院体育科学研究科体育科学専攻博士前期課程体育実践学コース・コーチング学系第一期生のうち、筆頭著者が指導教員として指導した男女8名（平均年齢26±3歳）であった。対象者に対して事前に研究の目的、意義等を説明し、研究への参加を依頼した。研究者が研究対象者の指導教員であったことの影響を軽減させるために、研究参加の依頼および実際のデータ取得は大学院修了式後に実施した。なお全てのデータ取得は大学院修了式後2週間以内（2013年3月11日～21日）に行われた。研究対象となった8名が執筆した修士論文の題目を表1にまとめた。指導教員やクリティカルフレンド^{注1}と共に振り返りを系統的に行いつつ、コーチング力の改善を目指すアクションリサーチ（AR）を実施した者は4名であったが、8名全員がARともいえる取り組みを行いつつ、コーチング力向上を目指した活動を行い、その結果を修士論文としてまとめていた。

データの取得

データの取得は半構造的インタビューを用いて行っ

^{注1} クリティカルフレンドはアクションリサーチにおいてコーチング力の改善を目指すコーチに対して批判的かつ建設的な意見を述べることを指す。同じくコーチングを実施している同僚のことを指す。今回は同じ研究室内でアクションリサーチを実施する者同士がクリティカルフレンドとしてお互いにアドバイスをし合った。

た。研究対象者からよりリッチなデータを引き出すため、インタビューの会場と時間については研究対象者の意見を聞いた上で決定した。すでに遠隔地でコーチとしての活動を開始していた2名についてはインターネットを介した映像と音声によるインタビューを実施した。研究対象者の同意の下、全ての会話をICレコーダーにて録音した。半構造化インタビューは事前に作成したガイドラインをもとに筆頭著者によって実施された。インタビューガイドラインでは大学院進学から大学院修了までを時間軸に沿って、「大学院進学目的→修士1年次の学び→テーマ設定→研究の実施→論文を終えて」のようにインタビューしていくことを想定していたが、研究対象者の回答内容にあわせて柔軟に対応し、刺激や探索といった手法を使いながらインタビューを進めた。研究課題に対して、研究対象者の回答内容が飽和状態にあると筆頭著者が判断した際にインタビューを終了した。インタビュー時間は36～54分の範囲であった。

データ分析

記録された音声データを再生し、発話情報を全て文字化した。文字数は5,307～19,158文字の範囲で、平均文字数(±標準偏差)は13,939±3,994文字であった。文字化された発話情報を大谷^{9,10)}によって示されている4ステップコーディングを参考に分析し、それぞれの研究対象者についてのストーリーラインを作成した。具体的には、発話された生の情報の中から注目すべき語句を抽出し(第1ステップ)、それらの語句をより一般的な語句で言い換え(第2ステップ)、第2ステップの語句を説明する、発話された生の情報内には明示されていない概念を見だし(第3ステップ)、前後や全体の文脈を考慮してテーマや構成概念を解釈し(第4ステップ)、全体の文脈を考慮してストーリーラインを形成した。これらの過程を踏むことで、研究対象者が発した言葉から研究対象者の考えを系統的に分析解釈していくことが可能となり、より客観的な視点から研究課題に対してアプローチすることが可能である。生成されたストーリーラインは研究対象者それぞれに戻し、本人のチェックを受けることで分析の妥当性を確保した。

結 果

半構造化インタビューにより得られた各研究対象者のストーリーラインを以下に示した。

コーチA

コーチAは内発的動機により大学院コーチング学系へ進学し、修士論文作成についても簡単には書けない

という意識を持っていたものの、1年次は特に実践面に力を入れ、論文作成に対する意識は薄かった。1年次の授業は知識の伝達となりがちで、実践力向上につながったかは疑問が残った。カンファレンスで指導教員より紹介された、自身のコーチング能力向上を狙ったARを修士論文の題材とすることにした。このテーマがコーチAの望むことと合致しており、コーチAはより自己決定された動機のもと、研究に取り組むようになった。ARでは同僚の手助けのもと、コーチング行動をビデオ撮影し、自らビデオ編集を行い、指導教員およびクリティカルフレンドとのリフレクションミーティングを行った。ビデオ撮影に関しては、本当に素の自分が出せているかどうかで課題と考えられた。また、ミーティング用に行ったビデオ編集作業にかかる時間も課題とされた。一方で、ビデオ編集を行う際に自分自身でコーチング行動を一通り見直すことになり、暗黙的な自己内省が行われていたという利点もみられた。今回のARは期間が十分とは言えず、より長い期間を設定し、計画的に実施することでコーチング能力向上が更に図れた可能性がある。また、ARの評価法についても、より明確な指標となるような方法論が必要だと感じていた。コーチAにとってはARの実施よりも論文の執筆が難関であった。それまでに自分の考えを論理的に文として表現した経験がほとんどなく、ARで得られた結果を文章として論述していくことが大きな試練であったといえる。コーチAはこの課題を、文献を読んだり、自分の文章を読み返すことで徐々に克服していった。実質的に修士論文の執筆を開始したのは中間発表の時期であり、その時期に指導教員によって提示されたアウトライン作成によって、論文の方向性が明確になった。また、アウトラインを作成したことにより、論理的な思考の大切さを認識すると同時に、論文の執筆が自身のコーチング実践力を向上させることにつながるという意識が芽生え、理論的根拠に基づいたコーチング実践をより意識するようになった。修士論文の提出期限が近づくにつれ、修士論文執筆にかかる時間が増加し、その分現場での実践にかかる時間が減少した。コーチAの場合はこの時期が対象スポーツのオフシーズンと偶然重なっていたため、論文作成に時間を優先的にかけることができた。修士論文の提出・審査が終わり、コーチAは修士論文を作成したことに対して肯定的な意見を持っている。先駆的な研究を実施したことと、コーチとして一人称での論文を執筆したことにより自信を持ち、論文をまとめたことでコーチング実践に厚みが増したと実感している。

コーチB

コーチBは最初の1年間は効果的な学びができず、

2年目最初の発表時に修士論文作成に関して危機感を抱いた。2年の夏頃から同僚と学習コミュニティを形成し、文献講読を行い知識の獲得を行った。修士論文のアウトラインをもとに中間発表を行ったが、研究の理論的根拠について深い理解をしていないと自己認識した。学部時代に論文を書いたことがなく、文章作成に対して苦手意識を持っていたコーチBにとって、アウトライン作成は論理的思考を訓練するのに有効であった。前例の乏しい領域の研究であることから、論文を完成させられるかどうかについて不安を感じていたが、アウトラインを作成することで最終的に論文完成に至ることができたと感じている。

コーチBは効果的なクエスチョニングスキルを習得するために研究手法としてARを採用した。ARは経験・知識不足のコーチが省察的实践者となるのに有効な方法論であるが、初期段階においては意志決定の選択肢が少なく、適切な意志決定が困難であると感じていた。選手のニーズによってはクエスチョニングが有効でないこともあると感じており、先行研究から得た知識を現場で実践していくには困難が伴うと実感し、様々な状況に対応できる準備が大切であると感じている。ARはコーチング能力を向上させるのに適した方法とされているが、目に見える効果が表れるには時間を要するため、ARの期間を長く設定し多くのサイクルを実施することが必要だと感じていた。時間的要素については執筆段階においても触れられており、執筆活動のために現場活動を制限せざるをえず、計画的な研究活動を心がけるべきであったと述べている。タイムマネジメントを適切に行うことで、現場指導と論文作成の両立は可能であるとも考えていた。ビデオ映像を用いたARは、省察ミーティングのために映像編集をする段階で、迷っているシーンなどを切り落としてしまっている可能性もあるので注意が必要であるとも述べていた。

授業などで様々な知識を得るとともに、異なるテーマを扱う仲間との交流により付加的な学びが誘発され、知識、特に宣言的知識の幅が広がった。これらの知識がアクションリサーチを通して手続的知識となり、さらに執筆活動を通して論理的な考察を行うことで、断片化して存在していた知識のネットワーク化につながった。また、コーチBは自分の行動や考えを書き残すことで忘却を防ぎ、自己の成長を促すための修士論文執筆であったと考えていた。修士論文の絶対的なレベルには満足していないが、その時点で自分が持っていた能力を出し切れた論文であると評価している。コーチBはさらに、現在社会的問題となっている体罰問題を受け、自分が目指す指導者像、自律性支援行動の大切さ、自身の研究の意義を再認識し、現場の

コーチ達に優れた方法を伝えていかななくてはならないという使命感を抱いていた。

コーチC

大学院進学時、コーチCは自身の競技者としての競技力向上の事例報告をすることで修士論文として認められると考えていた。実践学コース第一期生ということで修士論文の前例がなく、終着点が曖昧なまま研究を進めざるをえなかった。最初のころの学習では専門種目の知識だけに範囲が限られており、コーチングに必要な基礎的知識の獲得が行われてこなかった。研究テーマを最初に設定する際にも競技力向上に対する思いが先行し、理論的裏付けは薄かった。2年になり修士論文を現実的なものとして捉えるようになり、知識不足を補うために勉強のペースを上げたが、この頃にはまだ競技力向上の事例報告を行うという意識であった。中間発表に向けて論文のアウトラインを作成することになり、理論的思考の重要性に気付いた。指導教員から新しい知識の提供を受けながら、自分でアウトラインを充実させていったが、効率よく学習が進んだと感じていた。このとき、コーチCは学んだ理論的根拠が競技力向上に役立っており、日々の新しい気付きに楽しさを覚えていた。修士論文の学びによって練習の質が上がったと感じ、自信を持って競技会に挑んだが、結果は思うようにいかず、落胆した。成功体験をもとに論文を執筆するという意識を持っていたコーチCは、このとき、自らがたどったプロセスに関して、ありのままを伝えることに意義を見出した。

その後、論文執筆に集中するために競技を中断することを決断した。これは競技と論文作成の両立は難しいと考えていたからであり、実際に練習中にも論文を意識してしまい集中できないことが続いたと振り返っている。競技者としてトレーニングを続けていたコーチCにとって現場から離れるのは大きな不安要素であったが、幸いにもオフシーズンであり、論文執筆に集中したことでより多くの学びを得ることができ、結果として競技力向上にプラスになったと感じていた。実際に執筆を始めて、論理的な思考力が不十分であると感じたが、続けるうちに徐々にトレーニングされ、読み手の立場にたった文章を書くことを意識できるようになった。授業等で伝達されていた断片化していた知識が、理論的根拠に裏付けられた論文を執筆する過程において整理され、深い理解へとつながり、実践力向上に貢献したと感じている。これには、これまで自分が行ってきた実践に対する振り返りを行い、先行研究の枠組みを通して評価したことで実践の改善が行えたことも含まれている。さらに良い学びを行うためには、できるだけ早い段階で論文の目標を定め、アウト

ラインを作成し、論理的な思考法をトレーニングしていくことが必要だと考えている。時間的な余裕をもって論文作成にあたれば、現場との両立も十分可能であるとも述べていた。また専門競技のマスターコーチとの関わりも深くしていく必要があったと反省している。修了後に行われた学会で研究発表を行い、学外の研究者からも研究を認められ、同時に研究の方向性について新たな気づきが得られたと述べていた。今後も継続して学び続けることが大切であり、最終的には競技者として目標達成をしたいと考えている。

コーチ D

コーチ D は、入学当時は修士論文に対して典型的なスポーツ科学の実証的研究のイメージを持っていた。その頃は「効果的なトレーニング」を研究の題材として捉えていたが、授業等で現場の課題をディスカッションする中で、入学後1～2ヶ月のうちに、大切なのは「効果的なコーチング」であると意識の変化が起こった。ただ最初の頃は修士論文を意識していたというよりも、コーチング学の学びを楽しんでいたと述べている。実際に修士論文を意識し始めたのは1年の2月に研究テーマを申告した頃であった。前例のない論文を作成しなくてはならない不安感を抱いていたという。論文で扱うテーマは入学時から一貫して自分の興味あるものであったこともあり、既に明確になっていたが、それをどのように解決していけば良いのかという具体的な方法論についてのアイデアはなかった。2年になり中間発表までの間に研究は順調に計画通り進んだ。しかし、それから12月までのタイムマネジメントがうまくできず、現場での活動を最優先し、執筆活動に時間を割けなかった。論文に対する意識を高く持ち続けていれば、最後にまとめて行う必要はなかったと反省している。論文に対する意識が低くなった原因としては、執筆時期がチームの最大目標としている大会シーズンと重なったことが考えられた。研究を実施した8月は強化と論文の方向性が一致していたが、9月に入って方向性が合わなくなると論文に対する意識が薄れてしまった。自分が論文のことを確実に意識していれば両立できないことはなかったと考えている。

実践学コースは目的意識が明確なはずで、学びの目的と修士論文の方向性が合致すれば、論文を執筆することが目標達成に近づく道であり、執筆によって満足感が得られることになると考えている。コーチ D の場合、修士論文テーマが大学院に進学した目的と合致しており、最初から最後まで一貫していた。論文執筆を行うことで、理論的根拠に基づいた論理的な思考力が鍛えられ、文章表現力もトレーニングできた。自分の

用いる言葉に責任を持つ姿勢が養われ、ひとつひとつの言葉や事柄を深く考える力が備わったと振り返っている。概して、1年目の様々な学びの機会にコーチング実践に関するヒントが得られ、2年目に論文を書くことで自分のコーチングを整理でき、自分自身を向上させるきっかけになり、大学院進学の目的が果たせたと評価している。

コーチ E

コーチ E は、学びに対する強い意志を持ち合わせ、良い修士論文を書きたいと思っていたが、最初は修士論文の完成形がイメージできておらず、論文作成に対して不安を抱いていた。1年の2月にプロコーチとして地方に赴任し、コーチング活動を開始した。このとき AR を行うことは既に決定していたものの、遠隔地で論文指導を受けられるかどうかについては不安があった。しかし、遠隔地にいたデメリットを仲間や指導教員の協力で克服でき、前向きな態度で研究に取り組めた。

第三者から自分のコーチングに対する評価を受け、自分のコーチング力を向上させたいと思っていたコーチ E にとって、AR はニーズを満たしてくれる研究手法であった。2年の初め頃は方向性についての迷いはないが、方法論に関しては手探りの状態であった。2年の6～7月頃に AR の準備を開始し、実際の研究は9月から実施した。中間発表の頃には論文の完成イメージがつかめていた。遠隔地であったものの、自分に任せられたコーチング現場があり、コーチングと研究の両方に集中できる環境であった。職場も研究活動に関して理解を示してくれ、恵まれた環境で研究活動が行えた。テーマがコーチとしての自分の成長であったため、研究と指導実践がかみ合っていた。ビデオ撮影を始めたときに、映像の中の自分が本当の自分らしくないと思い、ありのままの自分を評価してもらえよう振る舞うべきだという気づきがあった。同時に、ビデオ撮影を行うことで身が引き締まる思いがした。ビデオを用いた AR で自分のコーチング行動の振り返りが行え、行動の修正点に自分で気付くことができた。この省察行動が行動修正には重要であると考えていた。課題としては評価対象となるシーンを自分で編集しているため、良い部分だけを編集してしまう危険性があることが挙げられた。コーチ E のコーチングの全体を評価した者はおらず、全体の流れなども評価して欲しいと思っていた。さらに、AR に関わる人選も課題として挙げられた。コーチ E の場合は専門種目のマスターコーチからの専門的なアドバイスが得られなかったことを反省材料としてあげていた。一方、同僚からのアドバイスは多く得られたことが良かったと思っていた。

る。研究を進めていくなかで、自分の理想のコーチ像ができあがっていき、ARを通して理想に近づくような学びができた。

学部生時代に文章を書くことを経験していなかったコーチEは、文を書くこと自体に苦勞した。また、グローバルな視点から知識を得るために英語の文献を読むようにしたが、語学力が不十分で知識の獲得に多くの時間を要した。しかし、修士論文執筆を行うことで、グローバルな視点から様々なコーチングの専門的知識を獲得し、自分自身が成長できて満足しており、コーチEにとって修士論文作成はポジティブな経験であったといえる。

コーチF

コーチFは大学院進学が目的がプレーヤーを続けることにあり、研究に関しては特段の目的を持っていたわけではない。ただ、大学院を修了するには修士論文を作成する必要があることは認識しており、プレッシャーに感じていた。1年の2月に研究題目を申告したときにも修士論文の方向性が決まっておらず、一般的な研究題目を登録した。1年の3月にマスターコーチから某チームの監督をするように言われ、そのチームを対象に研究を進めることにした。2年の初め頃からGame Senseを実験的に取り入れ、6月頃から本格的にピリオダイゼーションを取り入れた練習・研究を実施した。Game SenseについてはコーチF自身が興味を持ち、コーチングに取り入れることを決断した。しかし、その後の大会で結果が出ず、体力レベルの向上を図ることが重要と判断し、鍛錬期を導入した。このとき、コーチFはGame Senseと鍛錬は相反するものであると認識していた。選手も今まで慣れ親しんだ練習と違う練習に対して不安に思っていたようだ。Game Senseについて研究を行う上での懸案事項がその評価の仕方であった。最終的に選手に対して半構造的インタビューを行い、評価を得ることとした。文字おこしをしている時点では使えるデータなのかどうかについて不安に思っていたが、最終的にはインタビューデータをもとに考察を行った。

コーチングの方向性は正しかったと思っているが、ヘッドコーチとプレーヤーの両方の役割を同時に務めていたことを反省材料として挙げていた。また、論文執筆に時間を割かざるをえず、現場を休まなくてはならなくなった。シーズンオフと執筆時期が重なっていたことが幸運だったが、早い段階から計画的な論文執筆を行っていくことが必要であったと感じている。論文は文献などにある他人の意見を並べた感じであり、あまり自信を持っていないが、題材として扱ったコーチングについては自信を持っている。自分が行った

コーチング実践を論文として公表することで、他のコーチと知の共有が可能なるので良いと思うが、他人を納得させられるデータをもっと取得するべきであった。研究の過程で実際のコーチング現場で活用できる理論的背景を学び、それらをまとめていく課程で知識が整理された。ただ理論を受け入れるのではなく、理論を意見の一つとして捉え、批判的思考により吟味しながら取り入れていた。

コーチG

コーチGは、選手活動の継続を希望して大学院に進学し、入学当初は修士論文に対する明確なアイデアを持ち合わせていなかった。1年の後学期に怪我をして選手としての活動から離れなくてはならず、そこからコーチとしての活動を行うことになった。最初の研究題目提出時には映像分析をテーマとして設定し、パフォーマンス分析を通して勝つための方法を研究しようと考えていた。2年の6～7月頃までは選手としての活動をもとに論文を執筆する予定であったが、怪我が長引き、選手として論文から方向転換をせざるをえなくなった。指導教員からパフォーマンスプロファイリング（PP）を研究テーマとする提案があり、コーチGも心理的なことに興味があったことから、PPに取り組むことになった。コーチング対象としていたチームでも動機に課題があると思っており、PPで解決できる可能性を感じていた。2年の夏にチームに対して実際にPPを行い、様々なことが見えてきた。その原因を探るために動機に関する文献の調査を行った。中間発表までは理論的背景について詳細な学習ができていなかった。

その後、論文執筆に集中するため、現場から離れなくてはならず、辛い思いをした。その一方で同期生との交流が増え、自分の研究以外の内容についても学ぶことができ、広範囲の知識を獲得することもできた。マスターコーチはコーチGの修士論文執筆に理解を示しており、現場を離れて論文に集中するようにアドバイスを受けた。執筆の初期段階では、中間発表の流れのまま内容を膨らませ、知識を寄せ集めただけの文章になっていた。得た知識がコーチGの中で系統的に整理できておらず、表面的な学びになっていたと考えられる。そこから、自分の考えを他人に伝えるための論理的な文章作成に挑戦したが、これがコーチングの際にプレーヤーとのコミュニケーションのトレーニングになったと思っている。また、理論的背景を学ぶことで、自信を持ってプレーヤーに対することができるようになったと感じている。ただし、PPの実施方法や活用方法について多くの反省点を自分で挙げており、より良い結果を得るためには自分自身がPPを深く理

解する必要があったと振り返っている。様々な反省の原因として、研究をスタートさせる時期が遅かったことを挙げている。早く研究を始めることで、現場と研究のバランスがとれるようになって考えている。

コーチ H

コーチ H は具体的な研究テーマを持たずに大学院に進学してきた。学部生時代には論文を執筆した経験がなかったが、他系に所属する部活動の先輩の修士論文を手伝った経験から、修士論文の大変さを感じており、自分の修士論文に対して不安を抱いていた。実践学コース第一期生であったため前例のない論文に取り組まなくてはならないという意識も不安を助長するものであった。1 年次の実践研究法をはじめとする授業の内容についてはあまり記憶に残っていない。1 年の終わり頃、指導教員から AR の提案があり、ビデオ撮影等によって自己省察を行うことに興味を覚えた。方向性が定まってきたものの方法論に関しての知識がなく、何をして良いのか分からず不安であった。準備が不十分な状態で 2 年最初の授業内発表を行い、論文作成に対する危機感を感じたものの、前学期にはそれほど大きな進展はみられなかった。夏休み頃には同期生の中で協力して先行研究の調査を行い、相互にビデオ撮影を行おうという計画を立てたが、その後コーチ H は怪我により入院してしまった。その後も計画通りにいかず、常に不安を感じながら研究を進めていた。2 年前半は AR の方法論に関する先行研究の調査が中心で、内容にまで踏み込む余裕はなかったが、中間発表以降は内容に目が向くようになった。もともと、自身のコーチング行動をビデオ撮影することには興味を持っていた。実際に自分のコーチング映像を見て、主観的な自己認識と客観的な自己認識の相違に気付いた。実際の AR ではセッションの一部を対象としていたため、コーチング全体に対する評価ができなかった。また、評価する者に競技の専門家がいなかったことも反省点として挙げている。AR の課題に意識が行きすぎてしまい、行動が制限されてしまったとも述べている。コーチ H はこれらの原因については AR に費やした時間的要素を挙げている。できるだけ早くに方向性を決定し、計画的に余裕をもって長めの AR を行うことが必要だったと振り返っている。修士論文として実施した AR は、自分を見直すことに役立った。授業やディスカッション、文献講読など、様々なスタイルの学びを通して、コーチングの理論的根拠に触れ、それを実践に活かせることが自分の自信となった。特に論文執筆によって論理的な思考が鍛えられたと捉えている。コーチ H はその時点での持てる力を全て出し切ることができ、達成感を得たと述べていた。

考 察

本研究では日本体育大学大学院体育科学研究科体育科学専攻体育実践学コース・コーチング学系の第一期生のうち、筆頭著者から研究指導を受けていた大学院生コーチが修士論文作成に対して持っている認識を調査し、コーチとして修士論文を執筆することにどのような意義があるのかを明らかにするとともに、コーチ教育プログラムの改善に向けた示唆を得るために半構造化インタビューを実施した。修士論文作成に向けた研究を実施し、論文執筆していく過程においてコーチングに関する理解が深まり、論文執筆に対して肯定的な認識を抱えていることが明らかになった。それと同時に、プログラムの改善点に関する示唆も多く得ることができた。本考察では、まず「データの妥当性」について検討し、その後、時間軸に沿って、「進学の目的と研究に対する最初の認識」、「研究題目の設定と研究の実施」、「論理的な文章の作成に対する挑戦」について議論する。そして、特徴的な結果として表出した「他者との関わりからの学び」、さらには理論に裏付けられたコーチング力の向上を目指して取り入れた AR についての考察（「AR の評価」）を行う。最後に、研究対象者が認識している「修士論文執筆の意義」をまとめ、「改善に関する提案」を行うこととする。

データの妥当性

インタビューは指導教員であった筆頭著者が実施したため、何らかのバイアスがかかった結果となっていることは否めない。しかしながら、著者らの研究室では指導教員と大学院生の関係は師弟関係ではなく、学びのパートナーであるという意識を両者が持つように心がけていたため、インタビューにおいても研究対象者は自身の経験を比較的率直に表現することができたと考えている。また、インタビューの実施時期を大学院修了式後に設定し、教員と大学院生という関係性を少しでも軽減させられるように工夫した。研究対象者自身のチェックを得たストーリーラインを結果に示したが、それにはポジティブな内容ばかりでなく、ネガティブな内容も含まれていることから、本研究の目的を達成するために十分なデータの取得が行われたものと判断できる。

進学の目的と研究に対する最初の認識

研究対象者たちが大学院に進学した目的は、1) コーチとしての学びを求めている、2) アスリートとしての活動の場を求めている、の 2 つに大別することができた。コーチとしての学びはアスリートとして活動している時から始まっており¹¹⁻¹³⁾、効果的なコーチングを

行うために必要とされる知識^{14,15)}をアスリートとしての活動から得ていくことは重要なことであると考えられる。しかし、カナダのオリンピックコーチを対象とした研究で触れられているように、コーチにとってアスリートとしての経験が必須な訳ではない¹¹⁾ことや、本研究のコーチFがアスリートとしての活動とコーチとしての活動と学びの時間確保のバランスが難しいことを挙げていたことなどを考慮すると、アスリートとしての活動の場を求めている場合の進学については今後検討が必要な課題であると考えられた。

本学のコーチング学系は、これまでの高等教育機関におけるコーチ教育プログラムとは異なり、プラクティカムを多く取り入れたコーチングの実践力向上を主眼においたものである¹⁶⁾。開設にあたっては諸外国のスポーツ機関や大学院のコーチ教育プログラムの視察を行い、研究者養成を主眼においた大学院プログラムから、高度な専門的知識を身につけた実践者養成への転換を試みた^{1,17,18)}。これまでトレーニング科学やスポーツ生理学、スポーツバイオメカニクス、スポーツ心理学など、スポーツ科学領域で行われていた研究の多くは実証的研究であり、実験室的な環境の中で条件を制御しつつ行われたものであった。実際に、コーチDはインタビューの中で次のように述べていたことから、当初はコーチング学とトレーニング科学等の研究を同じように捉えていたことが分かる。

修士論文って、やっぱりその、実験とか、そういうイメージがあって、なんでしょ、科学の部分っていうか、スポーツ科学みたいな。で、なんかそういうイメージが、論文は読んではいたんですけど。実際にコーチングを学びにいったときに、えー論文にどういふふうにするのかなって、単純に、不安と疑問はありました。(コーチD)

逆に、コーチCはコーチDと別の捉え方をして進学してきた。

自分が入る前は、修士論文を事例報告を書くように捉えていたので、自分があるままに、自分をセルフコーチングして、結果を出して、良かったですっていう内容で書ければ良いと思っていて、結果が出れば良いと思っていたんですよ。単純に自分のやってきた行いが、こういうことをしたらこういう結果が出ますよっていう、一つの例を示せば良いと思っていたんですけど、実際にやってみたらうまく結果も出ないし、ただやったことを書くだけじゃ修士論文にはならないし。だから、もっともっと、甘くみてたっていうか。ただ、やってきたことを書く

だけじゃ修士論文はだめで、もっと理論に基づいて書いていかないといけないっていうのをちょっとずつ知ってって、論文を書く頃には。なんていったらいいですかね、自分がやっぱ甘くみてたんだなっていうことを実感しました。(コーチC)

いずれのケースにおいても、コーチング学領域の論文のあり方についての知識はほとんど無いままに大学院に進学してきており、その他の者も含め、ほとんどが不安を抱えて初年度の大学院生生活を送っていたことがうかがえた。

コーチングは本質的に複雑で動的で混沌としており¹⁹⁾、スポーツパフォーマンスの向上を目指した研究は学問領域を横断した視点から行われるべきであると指摘されている²⁰⁾。このような背景もあり、実践学コース・コーチング学系の第一期生である研究対象者たちは前例のない論文に取り組まざるを得ず、最終的な論文完成形がイメージできず不安を抱えていたと考えられる。これに対しては、研究論文作成を指導する側の準備が十分でなかったことが反省として挙げられる。しかし、コーチングに関する研究領域確立の歴史は比較的浅いことを考えれば、誰かが通らなくてはならなかった道であると言えるのかもしれない。スポーツコーチングに関する国際的な組織である国際コーチングエクセレンス評議会(旧名:国際コーチ教育評議会)が組織されたのが1997年、コーチングを冠した国際誌が刊行されたのは今世紀に入ってからであることを考慮すれば、スポーツコーチング研究が体系化されてきたのは比較的最近になってからであると言える^{21,22)}。日本では2010年に日本スポーツ方法学会が日本コーチング学会へ名称の変更を行い、学会誌もコーチング学研究へと変更された。そのようななか、コーチAは自らの修士論文に関して次のように述べ、新しい領域で学んだことを自分の自信になったと捉えていた。

でも、あとはやっぱり、自信になるっていうか、自信になったっていうのは大きいですね。論文、やっぱり、今の日本の中で、こういうコーチの論文っていうのは少なくて、それは調べてても分かるし、海外の英語のしかないっていうのを見て、そのコーチングの論文をつくれたことっていうのはひとつ、大きいっていうか、自分の中で自信になるっていう。(コーチA)

以上のように、研究対象者たちは、大学院進学時から修士論文作成を意識していたものの、修士課程1年目には論文作成のための活動はほとんど行っていなかったというのが現状であった。授業に関しては表面的な

知識の伝達となっており、系統立てて理解がされていない様子もうかがえ、内容については記憶に残っていないと評価する者もいた。しかし、授業のスタイルとして多く取り入れていたディスカッションについては高い評価をしている者が多かった。これらの点についてコーチ H は次のように述べていた。

大学院の授業は、ディスカッションであったり、みんな話し合ったりとかってというのが一番印象に残っているというか、学部の時はそのようなあんまりなかったもので、それがすごいためになったってというか。授業はそういう、ディスカッションという印象で。(中略) あまり前期のことは、今振り返っても、けっこう授業名と何やったかとかも一致しなくて。けっこう、前期はなんか覚えてないってことが多かったんで。(コーチ H)

これまで、大学やスポーツ機関が実施するフォーマルなコーチ教育プログラムに関する批判が多く報告されている⁷⁾。多くの情報を比較的短期間に詰め込もうとし過ぎたり、扱っている理論のいくつかは、毎日の実践からすると抽象的過ぎて価値があるとは言えないといった意見もある⁹⁾。しかし、コーチがフォーマルなコーチ教育を重要視しているという報告もあり²³⁾、何からどのように学びとっていくかは個人によって大きく異なっている可能性が高い¹¹⁾。本研究の対象者の中でもコーチ D のように授業で得たものがあると感じている場合もあった。

1 年目はやっぱり授業とかで、カンファレンスとかを通して、なんとなくヒントみたいなのを得てきていた感じがするんですけど。(コーチ D)

これらのことから、フォーマルなコーチ教育を提供する場合には、コーチのコンテキストや特性を理解し、それぞれに適した学びの場を提供することが重要であるといえる。

研究題目の設定と研究の実施

この大学院では、最初の研究題目登録が修士課程 1 年の 2 月に行われる。この際に提出した研究題目に関しては、研究対象者自らの興味から設定されたものと、指導教員から提案されて設定したものに分けることができた。指導教員から提案された研究テーマについても、それぞれの興味と結びついており、より内在化された状態で研究に取り組むことができていたと判断できた。

先生がカンファレンスで、パソコンで、こういう方法があったって出てきたときに、これはいいなって思っ、その時に思いましたね。(中略) 自分を見直したいというか、そういうのはかなり自分にとってはあってるなと思ったので。(中略) あのタイトルはやりたいことそのものだったので、(中略) 迷いは全くなかったですね。(コーチ A)

何ですかね。Game Sense 自体、僕もやってて、練習をやる側としてもすごい楽しそうだなってというのがあったんで。まあ、実際にコーチングに取り入れたら面白いんじゃないかなというのはありましたけど。(コーチ F)

まあ、どうやったらモチベーション上がってくれるのかなってというのは考えてて、そこにパフォーマンスプロファイリングっていう方法があるって聞いて、あっ、つながったかなってというような感じですね。(コーチ G)

自己決定理論²⁴⁾はアスリート・センタード・コーチングの理論的背景の中核をなす理論のひとつである。内発的動機によって決定した研究テーマに取り組むことがより望ましいが、コーチング学領域における研究の経験が浅い大学院生にとって適切な研究テーマを設定することは簡単ではない。研究指導教員との話し合いの中で、より内在化された研究テーマを見つけ出し、いくことが重要である。この過程を経験することは、アスリートの自律性を高めるためのアスリート・センタード・コーチングを身につけようと思っている大学院生コーチにとって非常に重要なものであると考えている。効果的なコーチングに必要なコーチの知識として、専門的知識、対他者の知識、対自己の知識があるとされている¹⁴⁾。コーチ教育が、コーチングの専門的知識の伝達だけに終わるのではなく、研究指導教員やマスターコーチとの関係性を通して、対他者の知識や対自己の知識を身につけていくことが可能なものである必要がある。

論理的な文章の作成に対する挑戦

論文執筆時の挑戦として研究対象者全員が挙げたのが論理的な文章を作成することであった。文章を作成するものの、それは様々な理論や用語の寄せ集めであり、執筆者自らの意見として表現できていなかったという反省が多く聞かれた。この問題に対し、多くがアウトラインの作成が論理的思考を行っていく手助けとなったと評価していた。アウトラインの作成は指導教員である筆頭著者から全員に対して指示したもので、

論理展開の骨子を組み立てた後にパラグラフライティングを行わせようという意図のもとに行われたものであった。次に示した2名のコーチのアウトライン作成に関するコメントから、彼らがアウトライン作成の重要性を認識していたことが読みとれる。

アウトラインが、いや、極端に言うとも、アウトラインのやり方を教えてもらって、卒業できたんだと思います。あれがロジカルに物事を進めていくことの大切さがわかりました。(コーチB)

主に、自分はこうやったら良いんじゃないのかって、アウトラインで書いてって、先生に相談して、こういうふうを書こうと思うんですけどって聞いて、先生がこの理論を勉強したらいい、この勉強をしたらいいっていうのを教えてくれたんで、けっこう効率よく勉強できてたのかなって思います。(コーチC)

アウトライン作成が論理的な思考を支援するのに有効であることが推察されるが、アウトライン作成も含め、自らのコーチング実践を修士論文として執筆することで、コーチング実践に関する認知プロセスが外化され、深い学びにつながったと考えられる^{25,26)}。

他者との関わりからの学び

研究対象者の語りの中から、他者との関わりが彼らの学びにとって重要な役割を果たしたことが読みとれた。同じくコーチとして学んでいる仲間との関わりから知識の深化や広がりが見られたと感じている者は少なくなかった。また、マスターコーチや職場の理解、指導教員からの新しい知識の提供など、自らの学びを加速化させる他者との関わりに関する語りが多くみられた。

メリットとしては、やっぱり、みんなで関わっていくことで、自分が書いていく以外のことも知ることができたし。(コーチG)

大学院で学びながら、あ、これは効果的なトレーニングというよりは、効果的なコーチングなのかなみたいなのを、どんどん感じ始めて、その自分の指導の仕方を、なんかよりもっと深めなきゃいけないんだっていうのは、ちょっと変化がありました。(中略)例えばコーチAとかが現場の問題があって、それについてみんなでディスカッションしたりとかっていう授業がありましたよね。あれをやっていくうちに、なんか自分でふと感じましたね。それは。(コーチD)

コーチとしての学びはフォーマルな学習場面よりもインフォーマルな学習場面において多く行われていると言われている⁷⁾。フォーマルな学習場面とは大学やスポーツ機関が運営するプログラムのことを指し、インフォーマルな学習場面とは突発的に起こる学習のことであり、学習の主導権を学習者が有している場合を指している²⁷⁾。コーチDが経験しているこの学びは、大学院の授業内で起こっていることを考えれば定義としてはフォーマルな学習場面での学びといえるかもしれないが、実際にはコーチDが学びの主導権を有し、突発的に起こっている学習と言えなくもない。フォーマルな学習場面であっても、インフォーマルな学習を引き起こすことは可能であり、そのためには学習者が主体性を持って参加できる学習環境の構築が重要であると考えられる。

ARの評価

筆頭著者が指導する大学院生コーチには可能な限りARを修士論文の方法論として採用するよう勧めている。ARは教育現場等で実践者のスキルを向上させるために用いられてきた手法で、スポーツコーチング領域でもこれまでにいくつかの先行研究が報告され、コーチングスキル向上に有効であることが示されてきている²⁸⁻³⁰⁾。ARは計画、実践、モニタリング、評価のサイクルを繰り返し、研究者である実践者の実践力を向上させたり、対象としている現場の課題を解決することを目的として実施する研究である^{31,32)}。本研究の対象者の中で系統的なARを採用した者は4名で、残り4名のうち2名もARの手法を参考に実践力の改善を行った。ARを系統的に行った4名がARの利点について語っている部分を次に抜き出した。

ARで自分の理想像に近づいていくっていう作業は、すごく自分のコーチング能力を上げていくのに、修士論文をやりながら自分が成長できたっていうのがすごく、何て言うんですかね、まあ、自分自身成長できたと思うし、修士論文を書くっていう過程自体がすごく良かったかなっていうふうに僕は感じます。(コーチE)

始めにビデオを撮って見ている時に、やっぱりその、自分の考えていることと違うっていうか、ああ、こういう、なんか、自分の声とかも、こういうトーンっていうか、こんな感じで喋ってたんだと思ったとか。(中略)なんか、視線で、一番思ったのは、なんか言った、たとえば、この子になんか言ったのに、なんで次そっち見てるんだろって、なんか違う方向見てて、なんか、おまえなんでそっち見て、そっ

ち見ちゃだめだろって思うことがあったりしたんで。そういうのはすごい、やっぱ見てよかった、ARでビデオ撮って、音声とかやることは、やっぱり勉強になったっていうか、良かったなっていうのはすごい印象に残ってます。(コーチ H)

ARをすることによって確実に前回は振り返って、反省を活かしての指導であるんで。まあ確実にコーチングスキルは向上していくのかなっていうのは思いますね。(コーチ B)

(ARのミーティングのためのビデオ編集に関して)でもやっぱり、自分のなかで問題がありそうなところをピックアップしているのは確かなので、良いところというよりは、課題のあるだろうっていう部分をピックアップしているので。考えてみれば、自分の動画を見ている時点で、自分にとってはかなり勉強になっているはずなので。編集するっていう時点、それ自体が、声をもう聞いているし、そこでもうひとつ、自分のなかで勉強にもなっていると思うので。(コーチ A)

ARを実施した研究対象者たちのコメントから、ARを通して、理論的根拠に裏付けられた理想のコーチ像の構築が行われ、自己省察を行うことで自己認識が進み、理論と実践の融合を図ることができたことが読み取れる。省察は優れた実践者になっていくために欠かせない行為である^{2,4,28,33-38}。効果的なコーチングを実践するために必要なコーチの知識の中でも、対自己の知識として省察や自己認識の重要性が指摘されている¹⁴。また優れたコーチは学びに対して受動的ではなく、積極的に学習の機会を探しているという報告¹¹もあり、自らの能力を向上させることへ自らをかき立てる対自己の知識が、効果的なコーチングに必要な他の2つの知識である専門的知識と対他者の知識の獲得に影響を与えているといえるだろう。修士論文としてARを取り入れることで、大学院プログラムが直接的にコーチング能力向上に貢献することができると考えられ、コーチ教育プログラムが現場から乖離しているといった批判^{3,5,7,39}に対する解決策のひとつになり得ると考えられた。一方で、ARの課題に意識が行き過ぎてしまい、逆に適切な判断ができていない可能性を指摘する者もいた。ARで効果が見られるには多くの時間を要することもあり、時間を十分にかけ現状の評価、適切な目的の設定と計画立案を行い、サイクル数を多く行っていくことが重要であると考えられた。

修士論文執筆の意義

今回のインタビューの中で、修士論文執筆の意義について語っている部分を以下に抜き出した。

かなり知識的には付いた。で、考えながらコーチングをするようになったので。1年生のときは明らかに違うコーチングにはなって。1年生のときには考えずして、過去の経験からそのものを出してますけど、2年生のときは、やっぱり、その、ふとリン(アスリート・センタード・コーチングを著した研究者の名前)の言葉が出てきたりとか、いろんな言葉が出てきて、あっ、っていつて立ち止まる部分かなり今でも増えているので。(中略)学びと修士論文はイコールですね。修士論文がなければ、(中略)分かってるけど身に付いてない、引き出しには入ってるけど、それは開いていない状態みたいな。でも実践のなかで、それを開けていつて。それがずっと開いた状態になっているっていうのが今が。それはやっぱり修士論文がかなりデカイと思いますよね。(コーチ A)

別に……、修士課程だから書いたってわけじゃないとたぶん思うんですね。何かしら形に残さないと、人間すぐに忘れちゃったりするんで。まあ、良いことも悪いことも。そのまとめる作業っていうので修士論文はやっぱり大切だと思いますね。(コーチ B)

修士論文を書く作業で勉強したり、知識をまとめたことで、自分のこれからコーチングをやるとか、セルフコーチングをやっていくっていうことに対して、(中略)すごい自分の中で明確になって、やるべき事がちょっとずつ分かってきたかなって思います。(コーチ C)

論文をまとめること、授業だけでなく、自分のその、大学院の場合、目的があってみんな来てると思うので。実践学コースは特に。なので、それを目的をちゃんと研究としてまとめるってことはした方が良いと思います。自分はやって良かったと思います。うん。(中略)論理立てる力は、コーチングに生きると思うので、やっぱ、書く事っていうのは生きる気がしますね。(コーチ D)

ある程度文献が読めて、知識が備わってきて、だれがこういうことを言ってるっていう、まあ、裏付けさえしっかりできてくれば、たぶんみんなコーチとしての成長はみんなしたいと思うんで、ARとかは、

僕はずっとやり続けても面白いと思うんですけど。(中略)すごくためになりましたね。修士論文書いてよかったなっていうふうには。(コーチ E)

たとえばコーチング学研究にしても、たとえ、トレ科とかバイメカ、何にしてもコーチングに活かせることはあるんじゃないかなって思って、そう捉えるようにしているんで。(中略)いろんなところからちょっとずつ、意見を参考にして、自分のコーチングに活かしてるって感じですよ。(コーチ F)

書くってことはいろいろ調べて自分で理解するってことで、自分が書いたことに対して、自分が自信が持てて、それを選手に本当に、本当にこれをやるという思いで、コーチとして選手に提供することができるんじゃないかなと思います。(コーチ G)

自分の伝えたいことを文字にして誰かに伝えるっていうことをすることで、たとえばその、中学校の部活をやったことを振り返るきっかけとか。ここを見直す機会とか、すごい自分を見直すのにすごい役に立ったなっていうか。なんていうんですかね。(中略)調べているときに、ただ自分がこうだからっていうふうに行っているんじゃないって、違う人もそういうふうに行っているって論文をみると、まあ、自信になるっていうか、(中略)間違ってたんだなって思ったりすることはすごいプラスになったと思います。(コーチ H)

本研究の対象者は、修士論文作成に向けた研究を実施する過程において、他者や様々な理論に触れることができ、具体的な執筆過程では断片化して存在していた知識が整理され、より深い理解へとつながったと考えられる。また、多くがコーチング実践力の向上につながったと認識しており、これらの成果に対して研究対象者は肯定的な評価をしていたことが分かる。これは先述したように研究テーマに対する動機づけの影響が少なからず関わっていることが考えられる。本研究の対象者が取り組んだ研究テーマはそれぞれのニーズに合致しており、内発的動機もしくは外発的動機によるものであっても内化された動機によって研究活動が実施されていた。このことから、修士論文に向けた研究および論文の執筆に関して言えば、コーチが主体的に学ぶことができるコーチ教育プログラムの運営が行えていたといえるだろう。

以上のことから、本研究の対象者についていえば、コーチ教育において修士論文の執筆にはある一定の意義を見いだすことができ、さらにはコーチの主体的な

学びを促すことに成功していたと考えられる。しかし、本研究は修士論文執筆の有無がコーチの学びと実践に与える影響を直接比較している訳ではなく、今後もコーチの修士論文執筆の意義については引き続き検討が必要であると考えられる。

改善に関する提案

論文執筆とコーチング現場での活動の関わりについて、改善を要する提案も得られた。論文執筆の時間確保のためにコーチング現場を離れざるをえない状況が少なからずみられたことは実践を重視するコーチング学系としては改善を要する部分である。本研究の対象者のほとんどは、中間発表を終えてから学位論文申請を行うまでの期間のうち後半に論文執筆を集中的に行っていた。この期間がオフシーズンのスポーツに関しては執筆に時間をかけることができたが、逆に現場でのコーチングにかける時間が少なくなってしまったケースが少なかった。一方、インシーズンのスポーツの場合、修士論文にかけられる時間が少なくなってしまった。これらの反省を踏まえ、早い段階での実際の研究がスタートできるような進め方と効率的なタイムマネジメントについて改善を行う必要がある。

また、数名の発話内容から、正規授業の効果についての検討が必要であることがうかがえた。授業に対する評価には個人差があったものの、明らかに数名の大学院生コーチに対しては効果的な学びを提供できていなかった。この事実をうけとめ、能動的に授業参加^{25,26)}できるようなカリキュラムや授業展開の改善、担当教員の教授スキル向上を早急に行う必要がある。

結 論

本研究では日本体育大学大学院体育科学研究科体育実践学コース・コーチング学系の第一期生のうち、筆頭著者から研究指導を受けていた大学院生コーチが修士論文作成に対して持っている認識を調査し、コーチとして修士論文を執筆することにどのような意義があるのかを明らかにするとともに、コーチ教育プログラムの改善に向けた示唆を得るためにインタビューを実施した。その結果、以下のことが明らかとなった。

1. 比較的新しいコーチング学研究領域で、先例の少なさなどから、研究対象者は修士論文の完成イメージがつかめず不安を抱えていた。
2. 授業は表面的な知識の伝達になっていた可能性もあるが、どのような学びが起こったかには個人差が大きく、各個人の学びを適切に起こすためには、学習者をより適切に理解することが必要である。
3. 論文アウトラインの作成が論理的な文章を構成するのに役立った。

4. 同僚や指導教員など、他者との関わりから多くの学びを得ていた。
 5. AR は、効果的なコーチングに必要とされるコーチの専門的知識、対他者の知識、対自己の知識を向上させるのに有効な手段と考えられる。
 6. 修士論文執筆を行うことで、深い学びにつながり、断片化していた知識が統合され、理論的背景に裏付けられたコーチング実践が可能になる。
 7. 2 年間で効果的に活用するためのタイムマネジメント、および効果的な学びを提供できるようにカリキュラムや授業展開等について改善を行う必要がある。
- 引用・参考文献**
- 1) 日本体育大学コーチ実践指導力の向上プログラム開発プロジェクトチーム. 平成 23 年度文部科学省大学スポーツ研究活動資源活用事業「コーチ実践指導力の向上プログラム開発」報告書. (国際文献社, 2012).
 - 2) Cushion, C. J., Armour, K. M. & Jones, R. L. Coach education and continuing professional development: experience and learning to coach. *Quest* (00336297) **55**, 215–230 (2003).
 - 3) Irwin, G., Hanton, S. & Kerwin, D. Reflective practice and the origins of elite coaching knowledge. *Reflective practice* **5**, 425–442 (2004).
 - 4) Knowles, Z., Borrie, A. & Telfer, H. Towards the reflective sports coach: issues of context, education and application. *Ergonomics* **48**, 1711–1720, doi:http://dx.doi.org/10.1080/00140130500101288 (2005).
 - 5) Lemyre, F., Trudel, P. & Durand-Bush, N. How youth-sport coaches learn to coach. *Sport Psychologist* **21**, 191 (2007).
 - 6) Chesterfield, G., Potrac, P. & Jones, R. 'Studentship' and 'impression management' in an advanced soccer coach education award. *Sport, Education and Society* **15**, 299–314 (2010).
 - 7) Cushion, C. & Nelson, L. in *Routledge handbook of sports coaching* (eds P. Potrac, W. Gilbert, & J. Denison) Ch. 29, 359–374 (Routledge, 2012).
 - 8) Kidman, L. *Athlete-centred coaching: Developing decision makers*. (IPC Print Resources, 2010).
 - 9) 大谷, 尚. 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 —着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学) **54**, 27–44 (2008).
 - 10) 大谷, 尚. SCAT: Steps for Coding and Theorization —明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—. 感性工学 **10**, 155–160 (2011).
 - 11) Werthner, P. & Trudel, P. Investigating the Idiosyncratic Learning Paths of Elite Canadian Coaches. *International Journal of Sports Science & Coaching* **4**, 433–449 (2009).
 - 12) Erickson, K., Côté, J. & Fraser-Thomas, J. Sport Experiences, Milestones, and Educational Activities Associated With High-Performance Coaches' Development. *Sport psychologist* **21** (2007).
 - 13) Gilbert, W., Côté, J. & Mallett, C. Developmental Paths and Activities of Successful Sport Coaches. *International Journal of Sports Science & Coaching* **1**, 69–76 (2006).
 - 14) Côté, J. & Gilbert, W. An Integrative Definition of Coaching Effectiveness and Expertise. *International Journal of Sports Science and Coaching* **4**, 307–323, doi:10.1260/174795409789623892 (2009).
 - 15) Gilbert, W. A focus on coaches' knowledge. *Routledge Handbook of Sports Coaching*, 147 (2013).
 - 16) Ito, M. & Sekiguchi, J. in *Contemporary Trends and Research in Sports, Exercise and Physical Education* (ed Chen Chee Keong et al.) 53–61 (Sports Science Unit, School of Medical Sciences, Universiti Sains Malaysia, 2013).
 - 17) 日本体育大学コーチ実践指導力の向上プログラム開発・展開プロジェクトチーム. 平成 24 年度文部科学省大学スポーツ研究活動資源活用事業「コーチ実践指導力の向上プログラム開発・展開」報告書. (国際文献社, 2013).
 - 18) 日本体育大学スポーツコーチの継続的専門能力向上プログラムの開発と展開プロジェクトチーム. 平成 25 年度文部科学省大学スポーツ研究活動資源活用事業「スポーツコーチの継続的専門能力向上プログラムの開発と展開」報告書. (国際文献社, 2014).
 - 19) Cushion, C. J., Armour, K. M. & Jones, R. L. Locating the coaching process in practice: models 'for' and 'of' coaching. *Physical Education & Sport Pedagogy* **11**, 83–99, doi:10.1080/17408980500466995 (2006).
 - 20) Knudson, D. V. *Qualitative diagnosis of human movement: improving performance in sport and exercise*. (Human kinetics, 2013).
 - 21) Gilbert, W. D. & Trudel, P. Analysis of coaching science research published from 1970–2001. *Research quarterly for exercise and sport* **75**, 388–399 (2004).
 - 22) Gilbert, W. & Rangeon, S. Current directions in coaching research. *Revista iberoamericana de psicología del ejercicio y el deporte* **6**, 217–236 (2011).
 - 23) Erickson, K., Bruner, M. W., MacDonald, D. J. & Côté, J. Gaining insight into actual and preferred sources of coaching knowledge. *International Journal of Sports Science and Coaching* **3**, 527–538 (2008).
 - 24) Ryan, R. M. & Deci, E. L. Intrinsic and Extrinsic Motivations: Classic Definitions and New Directions. *Contemporary educational psychology* **25**, 54–67, doi: 10.1006/ceps.1999.1020 (2000).
 - 25) 松下, 佳. et al. ディープ・アクティブラーニング: 大学授業を深化させるために. (勁草書房, 2015).
 - 26) 溝上, 慎. アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. (東信堂, 2014).
 - 27) Mallett, C. J., Trudel, P., Lyle, J. & Rynne, S. B. Formal vs. Informal Coach Education. *International Journal of Sports Science & Coaching* **4**, 325–334 (2009).
 - 28) Kidman, L. & Carlson, T. B. An action research process to change coaching behaviours. *AVANTE* **4**,

- 100–117 (1998).
- 29) Ahlberg, M., Mallett, C. J. & Tinning, R. Developing autonomy supportive coaching behaviors: An action research approach to coach development. *International Journal of Coaching Science* **2** (2008).
 - 30) Evans, J. R. & Light, R. L. Coach development through collaborative action research—a rugby coach’s implementation of game sense pedagogy. *Asian Journal of Exercise & Sports Science* **5**, 31–37 (2008).
 - 31) McTaggart, R. & Kemmis, S. *The action research planner*. (Deakin university, 1988).
 - 32) McNiff, J. & Whitehead, J. *All you need to know about Action Research*. 2 edn, (Sage Publications Ltd, 2011).
 - 33) Schön, D. A. *The reflective practitioner: How professionals think in action*. Vol. 5126 (Basic books, 1983).
 - 34) Gilbert, W. & Trudel, P. Learning to Coach Through Experience: Reflection in Model Youth Sport Coaches. *Journal of Teaching in Physical Education* **21**, 16–34 (2001).
 - 35) Knowles, Z., Gilbourne, D., Borrie, A. & Nevill, A. Developing the Reflective Sports Coach: A study exploring the processes of reflective practice within a higher education coaching programme. *Reflective Practice* **2**, 185–207, doi:10.1080/14623940123820 (2001).
 - 36) Moon, J. Using reflective learning to improve the impact of short courses and workshops. *The Journal Of Continuing Education In The Health Professions* **24**, 4–11 (2004).
 - 37) Gilbert, W. D. & Trudel, P. Learning to Coach through Experience: Conditions that Influence Reflection. *Physical Educator* **62**, 32–32 (2005).
 - 38) Carson, F. Utilizing Video to Facilitate Reflective Practice: Developing Sports Coaches. *International Journal of Sports Science & Coaching* **3**, 381–390 (2008).
 - 39) Abraham, A., Collins, D. & Martindale, R. The coaching schematic: Validation through expert coach consensus. *Journal of sports sciences* **24**, 549–564 (2006).
-
- 〈連絡先〉
 著者名：伊藤雅充
 住 所：東京都世田谷区深沢 7-1-1
 所 属：コーチ学研究室
 E-mail アドレス：itom@nittai.ac.jp